巻頭言

新　年　の　感

池　田　悦　治*

書を精読する者は，無知なる者にまさり，そを記憶する者は，精読する者にまされり．理解する者は記憶する者よりまされり．行ふものは，理解する者にまされり．

これは田辺繁子さん十年の苦心の結晶であると聞く「マヌの法典」の訳書から抜き書きしたもので，法典十二章の「最高の福祉をもたらす行為」という見出しの中にある一句である．

二千年も前のマヌの法典が示すように，われわれの科学技術は，常に実験によってその成果を確かめながら明日への挑戦を続けているのだから，社会の福祉をもたらす行為たるにちがいない．

思えば，技術が活動する世界は無限であって，その態様は無量である．われわれは，自らが研鑽努力して開発した技術によって，豊かな生活を得る半面，その技術の故に不測の生活障害を惹き起こすことが屢々である．

しかし，それからまたその欠陥排除の技術研究が始まり，更に新しい技術の開発を促がす．こんなパターンは，単に技術に限らず，長い長い間の人類の生活であって，文化の歴史とも言えるのだろう．

抑々技術は，ときには遅々として進まず，ときには，革命的な発展を遂げる性格をもつから，携わる技術者の苦心と歓喜は尋常ではない．

生産技術振興協会が技術と生産の相関に役割を求めて発足してから三十年になる．その間特に目立ったテーマを掲げて華やかな成果を収めたという記録を見ないけれども，扱われた研究技術のすべては，ひそやかに生産社会に生きて生活文化の建設に役立っているのである．

協会が，三十年間を歩むことができたのは，実にこの地味な研究者諸子の驕らない技術入魂にある．そして今日から一層力強く歩みつづけられるのは，再び研究者の静かな情熱によるのである．これをうけて協会は，更に姿勢を正し，よき研究者の土壌たることに専心しなければならない．徹底した良心によって．

わたくしはいま吉川英治氏の歴史観「すべての英雄豪傑は，時の流れの中に滅び去り，残るものは，人間的な庶民の善意のみである」を思い浮かべた．これとマヌの法典に学び得て新年に感ずるものは，遠い歴史の中にきこえる新しい歴史への鼓動である．

会員皆さんのご多幸を祈る．

* 池田悦治（Etsuji IKEDA），社団法人生産振術振興協会理事長